

## 中世東国における領主権力と地域社会

東北大学大学院文学研究科 歴史科学専攻

泉田邦彦

本研究は、戦国期の関東・奥羽における領主権力について、当該地域の史料上に特徴的に現れる「洞／うつろ」をキーワードに据え、領域支配の構造及び権力編成の実態を考察したものである。考察の対象は、室町・戦国期（一五・一六世紀を主とする）とし、関東では常陸江戸氏及び小野崎氏を、奥羽では南奥岩城氏を取り上げる。

対象時期を室町・戦国期に設定するのは、当該期の研究は時代間の橋渡しがなされておらず、時代を超えた視点から領主権力の変質を見通す視点が不十分な現状が挙げられる。近年の研究においても、室町期から戦国期への領主権力の変質／転換は十分に言及されておらず、戦国期権力がどのような過程を経て形成されてきたのか、前代までの在り方とはどのように異なるのか、未だ検討すべき課題が多く残されている。

また、関東と奥羽という二つの地域の領主権力を検討対象に据えたのは、明德二年（一三九一）に奥羽が鎌倉府の管轄に入り、関東とともに「東国」として把握し得る政治的枠組みが形成されたこと、史料上「洞」が頻出することが挙げられる。市村高男氏によれば、「洞」とは、一五世紀末から一七世紀初頭にかけての東国でみられる特有の結合原理であり、「屋形」・惣領を頂点として、その統制下に属しつつも、私「縁」や契約によって結集した一族・旗下国人層による一種の共同体」という、戦国期特有の権力編成と理解される（市村高男『戦国期東国の都市と権力』思文閣出版、一九九四年ほか）。このような共通性があるものの、従来の研究では、両地域にまたがる視点から当該期の領主権力を考察する姿勢は希薄であった。

そこで本研究では、まず、戦国期の関東・奥羽における領主権力研究を整理し、研究上の問題点を明らかにするとともに、本論文における課題を提示した。特に、市村高男氏の「洞」論、黒田基樹氏の国衆論（黒田基樹『増補改訂 戦国大名と外様国衆』戎光祥出版、二〇一五年ほか）に着目し、両者の論争を取り上げながら、それぞれの論の成果と課題を確認した。その上で、本研究の課題を以下のとおり設定した。

- ①戦国期の領主権力が如何なる過程を経て形成されてきたのか、「戦国期特有の所産」と評価される「洞」が如何なる過程を経て編成されてきたのかについて、室町期の在り方を踏まえて考察する。
- ②国衆論で明らかにされてきた領主権力の権力構造を踏まえ、支配基盤である村落を視野に入れながら、「洞」を基盤とする領主権力の領域支配及び権力編成を考察する。
- ③従来、家中・分国と言いつた「洞」の実態を明らかにするため、特定の領主権力を主軸に据え、「洞」に対する認識を考察する。
- ④北関東の領主権力を主な事例として立ち上げられてきた「洞」論を再評価するため、南奥の領主権力と比較することで相対化を図る。

上記の課題を解決するため、第一部では、常陸江戸氏及び小野崎氏を取り上げ、従来の「洞」論を深化させるとともに、第二部では、陸奥国大館城主岩城氏を取り上げ、従来の「洞」論の相対化を図った。構成は、第一部は第一章～第四章及び補論二本、第二部は第五章～第八章及び補論一本である。

一連の検討成果を踏まえ、終章では、中世東国の領主権力を捉え直し、「洞」論及び国衆論の再構築を行った。まず、「洞」の形成について。北関東・南奥では、一五世紀後半から一六世紀初頭にかけて発生した、一族間や周辺領主との内訌の過程で、イエの惣領が室町期以来の地域秩序を再編しながら、室町期とは異なる新たな支配領域及び権力編成を形成していったことを明らかにした。戦国期常陸・南奥における領主権力の権力構造は、地域秩序の再編を経て、新たに形成された支配基盤としての郡・領、及び権力基盤としての家中・「洞中」で構成され、惣領・屋形を中核とするイエ＝族縁の論理に基づく権力の在り方と評価した。

次に、国衆論について。奥羽における国衆論が、他の領主権力に従属していない独立した存在であっても、支配領域の規模の大小から国衆と把握していたことを批判した。その上で、先行研究が提起していた「郡主」概念を再評価し、奥羽における領主権力は「戦国大名・郡主－国衆」の構図で把握することが妥当であるという見解を示した。

最後に、「洞」論の再構築を試みた。本論文の検討を通して明らかになったのは、「洞」と「他家」とは明確に区別され、そこには血縁関係・擬制的血縁関係を媒介とした同族結合の意識が存在したということである。「洞中」は当主との重縁関係を有し、「累代之一味中」と認識され、「味方中」＝「他家」とは異なる存在として位置づけられていた。他の領主権力に従属していたとしても、「他家」とは呼べない「ウチ」の存在、それが「洞中」だったのである。また、「洞」は戦国期のみ使用が確認されると理解されていたが、近世相馬中村藩で使用され続けることを見出した。相馬中村藩においては、「洞」＝藩領の意で用いられ、イエと支配領域とが一体のものとして捉えられていたのである。戦国期に多様な在り方をみせた「洞」は、最終的に領主権力のイエを表わすものへと集約されていくという展望を示し、「洞」の終焉に対する新知見を提示した。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	泉田邦彦
論文審査担当者	(主査) 教授 柳原敏昭 教授 安達宏昭 教授 堀 裕 准教授 籠橋俊光 准教授 引野亨輔
論文名	中世東国における領主権力と地域社会
<p>本論文は、室町・戦国期（15～16世紀）の北関東・南奥羽を中心とする東国における領主支配の特質や権力編成の動態を「洞」論の視点を踏まえながら考察したものである。「洞」とは、室町・戦国期東国で見られた、惣領を頂点として、私縁や契約によって結集した一族・旗下領主層による一種の共同体であり、当該期東国の領主権力を考察する際の鍵概念とされてきたものである。</p> <p>序章では、先行研究を整理し、課題を述べる。</p> <p>第1部は、常陸国の佐竹氏・江戸氏・小野崎氏に焦点を当てた4つの章と2つの補論から構成される。第1章・2章では、15世紀末～16世紀初頭および16世紀半ばの2つの内訌を経ることで、佐竹氏「洞」が再編されたことを明らかにする。第3章では、江戸氏を素材に、「洞」を基盤とする領主権力は、村落・民衆を掌握し得なかったという通説に対して、在地社会の中核をなした給人・土豪層を従属させることにより、それを実現していたことを主張する。第4章では、江戸氏と領内宗教勢力との関係について、同氏が領内の多様な宗教状況に配慮し、調停者の立場を保持せざるを得なかったことを明らかにする。2つの補論では、史料と流通の面から本論を補う。</p> <p>第2部は、陸奥国南部の岩城氏に焦点を当てた4つの章と1つの補論から成る。岩城氏の惣領の系譜についての従来の誤解をただした上で、4章を通じて、15世紀後半以降、岩城氏が岩城一郡を超えて周辺郡荘をも支配する領域権力となり、その過程で郡も旧来のものから変質を遂げ、岩城氏がその郡を統べる郡主と概念化される存在となったこと、その段階の同氏の「洞」が血縁関係・擬制的血縁関係を媒介とした同族意識の下、旗下領主を緩やかに権力の一端に編成したものとなっていたことを主張する。さらに岩城氏が、在地を基盤とした一族・給人層を通じて村落と民衆に対する領域支配を実現していたこと、非常時に彼らを動員するための論理を案出していたことを明らかにする。補論では、上記の成果が、近隣の相馬氏にも適用可能であることを述べる。</p> <p>終章では、本論文の成果を総括し、北関東と南奥羽の共通性と差違について整理する。</p> <p>本論文は、基礎作業として史料を博搜し、中世史研究では困難な新史料の発掘を行うとともに、周知の史料についても精緻な批判を行っている。その上で、室町・戦国期を通観し、支配や権力の構造の変化をとらえ、各時代固有の領主支配および領主結合のあり方を析出した。このことにより、「洞」ひいては当該期の東国領主研究を進展させた。斯学の発展に寄与すること大であり、論文提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	